先天性サイトメガロウイルス

新生児300人に１人が感染

スクリーニング体制構築急ぐ

検査の標準化や妊婦の啓発など課題

難聴や脳障害の原因に

治療法はいまだ確立せず

厚生労働科学研究

胎児が感染すると難聴などの原因となるサイトメガロウイルス（CMV）の先天性感染が、新生児の300人に1人という高い割合で起きている。にもかかわらず、妊婦や新生児へのスクリーニング体制や先天性CMV感染児に関する治療法は確立していない。厚生労働省のCMV母子感染に関する研究班のメンバーである神戸大学医学部附属病院周産母子センター小児科の森岡一朗講師に、最新の研究成果について聞いた。

神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科学分野（同大学医学部附属病院周産母子センター）
森岡　一朗講師

サイトメガロウイルスは健康な大人や子どもにほとんど影響はないが、胎児が感染すると難聴や精神発達遅延などを起こすことがある。1000人に1人とされる新生児・幼児の聴覚障害の約2割がCMV感染によるものと言われている。

「出生時に症状がない場合でも、先天性感染児の10～15%が遅発性の難聴などを起こします。この場合、新生児聴覚スクリーニングをすり抜けてしまうという問題があります。先天性CMV感染児の多くは出生時には症状がないため見逃されているのが現状です」

近年、日本では妊婦のCMV抗体保有率が約7割まで低下。ワクチンもないため、2008年から厚生労働省の事業としてスクリーニング体制の構築や効果的な検査・治療法を探る調査・研究が行われている。

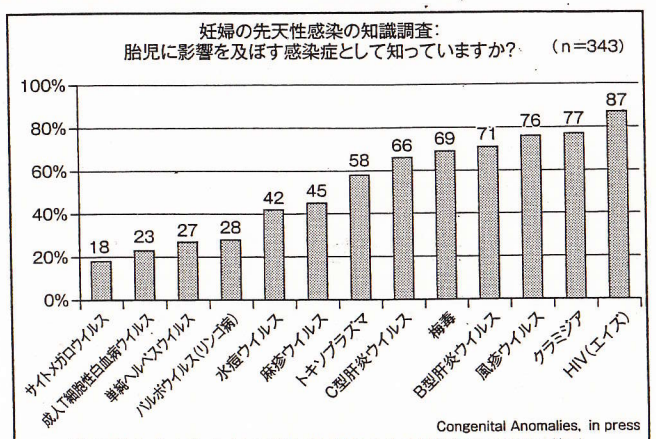
「妊婦の血液検査によるスクリーニングで初感染のケースは絞り込めるようになりましたが、再活性化や再感染により発生する先天性感染児を同定するまでには至っていません。新生児の尿CMVスクリーニングでは先天性感染児を同定できることが分かりましたが、尿の採取方法や検査の標準化に課題が残っています」

同研究によると尿検査で感染が判明し2歳以上までフォローアップできた62人のうち、出生時には何の症状もない無症候性の感染児は45人。このうち正常発達を遂げていたのは40人で、残る5人には遅発性片側難聴や言語発達遅延、自閉症、注意欠陥多動性障害が見られた。

一方、出生時から何らかの症状を有した症候性の17人のうち14人という高頻度で神経学的障害を残していた。しかし、抗ウイルス薬療法を行った10人の中で、3人が正常発達を遂げており、障害を軽減できる可能性があった。

「出生後早期に感染を同定できても、7割以上がその時点では症状はありません。一方、治療薬は万人に有効ではないうえ長期的な副作用が分からず、先天性CMV感染症に使うことが世界中で認められていないのが現状です。全新生児を対象に尿検査によるCMVスクリーニングを行うには、長期的なフォローアップ体制が不可欠で、その体制づくりについても研究が進められているところです」

また、妊婦の意識調査では「胎児に影響を及ぼす感染症としてサイトメガロウイルスを知っている」と答えた人がわずか18%（図参照）だった。一般にCMVの認知は不十分であることから、研究班では啓発のためHPを開設。感染予防法などを掲載している。HPはhttp://www.med.kobe-u.ac.jp/cmv/



「先天性サイトメガロウイルス感染症対策のための妊婦教育の効果の検討、妊婦・新生児スクリーニング体制の構築及び感染新生児の発症リスク同定に関する研究」平成23～24年度厚生労働省研究班より